

小学校家庭科における実践的態度を育成する授業デザイン

菊池 沙羅 (教育実践コース)

1 小学校家庭科における「実践的態度」の定義付け

(1) 「実践的態度」に着目した理由

本研究は、小学校家庭科において、児童が学んだことを家庭や地域など、実生活に生かすことができる「実践的態度」を育成することを目的としている。ICT化やAI化が進む昨今において基礎基本を学ぶことの意義を理解しつつ、現代社会に合わせた知識・技能の工夫を考えられる児童を育成すべきであると考えている。

そして、家庭科で学ぶことを児童が何となく理解するのではなく、自らがこれからの社会について考え、変えていきたいと思うことができるような態度を養うことを目標としている。また、「能力」ではなく「態度」としたのは、結果だけでなく思考過程も大切にしたいと考えたためである。

最終目標は、児童が日常生活に学習を生かすことであるが、この研究では、そのために授業をどうデザインするのか、というところに焦点を当てていく。

(2) 小学校学習指導要領解説家庭編で求められていること

学習指導要領解説には以下が示されている。

生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けるとともに、知識及び技能を活用して、身近な生活の課題を解決したり、家庭や地域で実践したりできるようにすることを目指している。

これをふまえて筆者は「実践的態度」を具体的に以下のように定義づけた。

生活課題を見出し、学びを工夫して解決策を考え、家庭や地域などに生かそうとする態度

2 1年目の授業デザインの構想

筆者が示した「実践的態度」は、授業で学んだことを家庭や地域に生かすために応用したり工夫したりし、学校で学びが閉じないことを意味する。言い換えれば、「実生活において、自らPDCAを回していこうとする態度」のことである。

食分野での授業実践を行った。PDCAサイクルで授業を構成し、家庭における課題を立てて児童が夕食のメニューを考え、家庭で実践をした。また、キーワードとして「素敵な食事」を提示し、条件付けを児童と行った。これは家庭での実践における問題意識をもちやすくすることができたと考えられる。

以上の工夫の有効性が得られた部分は、汎用性を得ることも目指して、2年目では食分野以外での授業実践を行うこととした。

3 2年目前期の授業デザインの構想

食分野での実践をふまえて、2年目の前期に消費生活分野での授業実践を行った。タブレット端末が導入されたため、ワークシートではなく、タブレット端末を用いても有効性が得られるようにした。

タブレット端末を使用し、授業内ではロイロノートの提出箱や画面共有、テレビ画面への映し出しを行った。家庭での買い物における実践として、カメラで記録をしたり、思考の整理をできるようにしたりしようと考えていたが、家庭への配慮により家庭での実践を行うことができなかった。シミュレーションゲームのようなもので買い物のやり方について全員が考えながら体験できるように準備をする必要があった。

2, 3として食分野、消費生活分野二つの授業実践を終えて、PDCAサイクルで授業を構成することやキーワードを提示することに関して、有効性を得ることができた。また、ワークシートやタブレット端末の使用に関して、それぞれの良さを取り入れた授業を構成できるよう、後期の授業実践で工夫することとした。

4 2年目後期の授業デザインの構想

食分野、消費生活分野での授業実践をふまえて、衣分野・住分野における授業デザインとして以下のような工夫・改善を行った。

- ① P D C Aサイクルの前にRを取り入れ、R-P D C Aサイクルで構成する。
- ② ワークシートがP D C Aサイクルの定着に効果的だったため、ワークシートを中心に、ロイロノートも活用する。

①について、P D C Aサイクルを児童自身で自分で回すためには、児童それぞれが理解をしていなければならない。そこで、考える視点としての基準点を設けるため、Rを取り入れることとした。

②については、P D C Aサイクルが児童の中で定着するためにワークシートを使用した方が効果的だと考えたため、ワークシートを中心に使用していくこととした。タブレット端末の利点もあるので、授業を効果的に進めていくためにもロイロノートも活用するようにした。

この工夫・改善を基に、衣分野・住分野での授業実践を行った。

(1) 指導の構想

① R-P D C Aサイクルでの構成

Research の段階では、冬を暖かく住まうためにできる工夫を、体験を通して学ぶようにする。そうすることで、児童が実生活に活かしやすくなることを期待する。この段階での指導内容は2点である。

- i 教科書の内容が世界共通の目標であるSDGsと一致していることを取り入れることである。エネルギーをみんなにそしてクリーンにという項目を取り上げ、資源が有限であることを認識できるようにする。
- ii 着方や住まい方の工夫を、体験を通して学ぶことである。教科書等を参考にしながら、実際に体験することで理解へとつなげ、実生活へ生かしやすくする。

また、P D C Aサイクルを授業内で3回回すよう工夫する。1回目は学校内や教室での過ごし方について、寒さで困っていることを学級内で出し合い、改善策を考える。1回目に全員で行うことにより、どのような困り感があるのか児童それぞれの視野を広くすることができる。

2回目は、児童の自宅で、主に児童自身が過ごす場所での困り感を可視化する。これは、児

童の過ごす環境は異なるので主に個人で考えるようにする。

3回目は、自宅での改善をふまえて、家族に暖かい住まい方を提案する。児童自身が実践してみて良かったことを共有したり、家族の困り感を改善してあげようとしたりすることで、応用範囲を広げることができる。

3回に渡って実践を行うことでP D C Aサイクルの定着を図る。

Do の段階について、1回目では、全員で共通の認識をもつために、教師と児童が一緒に行う。例えば教室の窓際と真ん中では寒さの感じ方の違いがあったり、カーテンを開けるか開けないかで暖かさに違いがあったりすることを認識した上で、改善方法を、板書を用いて一緒に考える。服や靴下の素材を考えたり、着方について考えたりできるようにする。

2回目や3回目は各家庭で環境が異なるので、配慮を行いながらも共有できる部分は共有を行い、どのような工夫があるのか、児童同士でも工夫を獲得できるようにする。

Check の段階について、1回目の評価は学校で行うので、実際に体感してどのように感じたのか、記す。2回目には自宅で自分のための実践を行うので、自分で感じたことを記す。3回目は家族のために実践を行うので、家族からどのような反応があったのか、感想をもらえるようにする。

Action の段階について、1回目には学校での体感を自宅でどのように活かすことができるのかを考え、2回目には自分の過ごす場所のできた工夫を家族にどのように提案をすると良いのかを考えるようにする。そして3回目には家族への提案を終えて、その後どのようにして冬を暖かく住まうようにしたいのかを記し、授業後も児童自身がP D C Aサイクルを回していくことができるようにする。

自分を思い、家族を思い、そして他者を思いするようにすることでSDGsへとつなげていけるようにする。

② R-P D C Aサイクルを具現化するために工夫したワークシート

R-P D C Aサイクルを具現化するために工夫したワークシートは次の通りである。

図1 「賢く暮らそう」のワークシート

工夫点として、左上の部分には既習事項をポイントで書くことができるようにした。これは第2章で行った授業実践で有効性を感じたため、この実践でも同じ形式で行った。

既習事項の確認を行ったら、左下に、教室でのPDCAができるように枠組みを作成した。困り感を上部に記入し、改善点を困り感の左下に記入する。そしてそれをふまえて振り返りとしてCheckとActionを併せて記入する。この書き方を、自宅の自分が過ごす場所や家族への提案でも行う。こうすることで児童は書き方に慣れ、PDCAサイクルが定着しやすくなる。

3回のPDCAを行うにあたって、既習事項から逆Nの字のようにワークシートを作成した。PDCAサイクルという円を描くようになっている印象であるが、今回このようにしたのは、授業が終わった後にも他者を思って実践を続けられるようにという意図をもっている。1周で終わらず、この形式のものが絶えず続いていることを表すことができるようにした。

③キーワード「賢く暮らそう」の提示

そしてキーワードについて、「賢く暮らそう」と提示した。本来、この題材の教科書における表題は「冬を明るくあたたかく」であった。筆者がこの表題を「賢く暮らそう」に変更したのは、単純に明るくすれば良い、暖かくすれば良い、といったような捉え方ができることは、授業後に実践へと繋げにくいと考えたからである。電化製品等に頼りすぎることは環境への配慮に欠けてしまうので、総合的に考えられるよう、「賢く」という言葉を用いた。

「賢く」という言葉を使用することにより、暖房器具の過度な使用は環境問題につながったり、限りある資源の寿命を縮めたりすること

を意識できるようになる。それをふまえて電化製品に頼りすぎない工夫を考えることができる。また、授業内で「賢く」をテーマにすることで、学校内や家庭での改善点を考える時に視点の一つとして取り上げることができる。普段の過ごし方から工夫を見出せるように意識を持ちながら授業を、そして実践を進めていくことができる。

(2) 第6学年「賢く暮らそう」の授業実践

① 題材の目標

- ・衣服や住まいに関心を持ち、冬を暖かく住まう工夫を理解している。【知識及び技能】
- ・自分の普段の過ごし方を振り返り、暖かく過ごすためにできる工夫を考え、実践できる。

【思考力・判断力・表現力等】

- ・冬の暖かい住まい方について、資源の有限性を考慮して教室や家で工夫しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

② 題材の指導計画

時	学習のねらい(○)
1 R	○教科書や、写真を見ながら冬の生活について考える。 ○SDGsに関連して、燃料などに頼らずに住まう工夫を考える。
2 RP	○着方、住まい方の工夫について体験を通して学ぶ。
3 DCAP	○教室を過ごしやすくするための工夫を全員で考え、実践する。 ○教室と家で、同じ部分や違う部分を探し、それに合わせた過ごし方を考える。リビングや自室で。
4 CAP	○家ではどのような工夫ができたか振り返り、共有する。
5 CAP	○家族のために、どのような工夫ができるか、提案できるようにする。 ○それぞれの家庭にあった冬の住まい方を選択し、理由を述べる。

③ 授業の実際と考察

まず、Researchの段階についてである。暖かく過ごすための工夫を「着ること」「住むこと」「食べること」の3観点に分けて考えた。教科書を見たり、児童自身の行動を可視化したりして、どのような工夫があるのか挙げていった。可視化ができたため、良かった点である。

3観点の工夫について、資源は無限にあるわけではないことを伝え、どのようにすると「賢

く暮らしていけるのか」をテーマとした。化石燃料に頼りすぎると資源が底を尽いてしまうことからSDGsに繋がれたこともまた、授業の中で流れに乗せて展開をすることができ、児童のSDGsへの意識化が図れたのではないかと考えられる。

教室で行った実験について、暖かさを感じられるよう温度計を用意するなど工夫が必要であった。当日は用意できていなかったが、暖かさを感じられていた児童の意見を共有するよう意識していたら、暖かさを感じられなかった児童も少しは暖かさを感じられたかもしれない。事前実験を丁寧に行うべきであった。

次に、Plan & Do & Checkの段階についてである。PDCAサイクルの1周目として実際に教室で実践を行う予定であったのだが、なかなかその日その場では難しく、改善点を考えることまで行う形をとった。2周目の自宅の児童自身が過ごす場所での実践と3周目の家庭での実践については実施することができた。家庭での振り返りとして、ありがとうとお礼を言ってもらえて嬉しかったと感じる児童が多かった。感謝の言葉をもらえたことは、授業後も児童が実践を続けていく活力となったのではないかと考えられる。また、ストーブの温度が高かったり、部屋のドアを開けばなしにしていたりなどの困り感が改善されてよかったと感じる児童もいた。全体的に実践の結果を肯定的に捉えていた。保護者からもまたお願いね、といったことを言われ、実践が授業後も活きるのではないかと捉えられる部分もあった。

全体の振り返りとして、資源の有限性について考え、電化製品に頼りすぎないように気を付けていきたいといった意見や、感謝されたことが嬉しかったので続けていきたいといった意見が見られた。暖房器具に頼りすぎずとも暖かく住まう工夫があることを実感できている児童が多かった。

(3) 成果と課題

まず、成果について、ワークシートを一枚にし、既習事項と全3回分の実践を見られるようにしたことは、児童が学習を進める上でも、筆者が指導を行う上でも効果的であった。

課題については、教室での実践ができなかった点が挙げられる。事前に連絡をし、重ね着をしてきたり厚手の服を着てきたりするよう指示を出すべきであった。

5 総括

これまでの実践を通して、実践的態度を育成する授業をデザインするための有効な観点や方法について、以下に述べる。

(1) PDCAサイクルに基づいた授業構成

実践的態度を育成するためには、児童自身が、生活の中での課題を見出し、その解決に向けて、自ら解決の方法を考え、試行し、さらに方法を改善して、実生活に生かすことが必要である。それ故に、実践的態度を育成する授業デザインにおいては、児童自身が自らPDCAサイクルに基づいて、生活の課題解決に向けて取り組めるようにすることが重要である。そこで、実践的態度を育成する授業自体をPDCAサイクルに基づいて構成することが重要である。

授業で習ったことを理解したら、それを実生活に活かせるようになることを目指して授業実践に複数回取り組んだ。下記のように授業内でPDCAサイクルを回したり、ワークシートを工夫したり、キーワードを提示したりすることが有効な働きかけであった。

(2) 実践の目的を共有できるキーワードとしてのSDGs

題材とSDGsの内容で一致する部分を授業で取り上げることでその題材を学ぶ意義を共通で認識できる。実際に問題として取り上げられていることを提示することでより実生活に活かそうという態度を養うことにつながる。

(3) 体験実施のための個別化

実践をするといっても全児童が同じことを実践するのではなく、それぞれの家庭に応じた実践の仕方を考えることで、授業後も実生活でどのように工夫したら良いかを自ら考えられるようになる支援となる。

(4) 実生活で継続できることを目指す指導計画の立案

このPDCAサイクルを指導計画に取り入れ、それに基づいて授業もPDCAサイクルで構成・実施することは有効的であったと考えられる。実際に家庭で実践を行うことでPDCAサイクルを回すイメージを児童自身が抱け、授業後も自分で回していくことが期待できる。授業内でPDCAサイクルを1周回す中で、児童がイメージしにくかったり普段触れる機会が少なかったりする題材ではRの段階を加えることで児童はその題材を身近に感じられるようになり、PDCAサイクルを回すにあたって現実味をもって考えることができる。